ん。終わりに、亡くなられた多くの方々の冥福を心からお祈り申し上げます。

ライチハでの抑留生活

北海道　桐木留吉

大正九年、勇払郡安平村で生まれ、同郡厚真村の小学校高等科二年卒業。同村及び留萌郡鬼鹿村で家業の炭焼き作業を手伝い青年期を過ごした。

昭和十六年二月、北部七部隊（工兵第七連隊）「旭川」に現役入隊。直ちに満州国東安省の工兵第八十三連隊に転属。同十二月に中支に一時派遣されたが、戻って東安省の警備に当たり、陸軍伍長となり、終戦時は関東軍第二幹部教育隊第四小隊の分隊長であった。

二十年八月、突如ソ連軍に急襲され、牡丹江付近で民間人を巻き込んだ混戦状態となり、女性を含む多数の死傷者が出た。この時点で関東軍の規律統制は崩壊し、軍民混在でソ連軍に拿捕され、牡丹江近郊に軍人のみ二千名の集団とされ、武装解除の上、同年十一月下旬、貨車でソ連領に連行された。

抑留先は、アムール川を挟む黒河対岸のライチハで、帰還までここに収容されていた。

畜産地帯と見られ、牛を追い出した牛舎が収容先となった。丸太作りの壁塗り、堅牢な建物で糞臭漂う中、ここに押し込められたが、一人当たり畳一枚分の余裕はあった。採光、換気不良であったが、暖房（薪）効果高く、終戦時の服装のままで過ごせ、ソ側からの防寒具は支給されなかった。牛舎一棟当たり二～三百人収容され、これらの牛舎がかなり散在していた。

ソ軍の女医から炊事要員に指名され、他の要員と共に二千人の同僚のため炊事作業に就かされ、帰還まで続けさせられた。

支給された糧秣は粗悪なもので量も少なく、塩蔵鱈のスープ、雑穀の粥のみで常に飢餓状態が続き、所外で集めた雑草で補食したが、飢えは募るばかりであった。しかし　私は炊事担当で、この悲惨さから免れることができた。同胞たちは栄養失調の中、出役させら

れ、疲労困憊の末倒れる者多く、連日牛舎入口に二、三体の屍を見る状態となり、冬は雪中に埋め、融雪後数カ所に合同埋葬した。

また、逃亡者は行方知れず、銃殺されたと聞く。

民主化教育はしばしば行われ、新聞切抜きのレーニン、スターリンの写真を壁に貼り、ソ連への忠誠を示す素振りを見せ、日本人のみの自主管理で事件も起きず、比較的平穏な生活が続いたが、炊事要員には何のかかわりもなかった。私は炊事作業の実績を認められたためか、収容所近郊で映画を見る楽しみもあった。

昭和二十二年四月中旬、ここから貨車に乗せられ、丸一日足らずでナホトカに集結させられ、直ちに乗船。四月十六日舞鶴に上陸し、一年八カ月の抑留生活は終わった。

帰国後、北海道留萌林務署に勤め、昭和五十六年三月に退職。その後札幌市に居を構え、町内会長、老人倶楽部役員等を任された。平成八年六月、妻を亡くし一人身となったが、倶知安在住の長男、札幌在住の嫁いだ長女、次女とも交流し、今後の処世を思案中である。

私のシベリア抑留

神奈川県　大高　武

昭和八年、国府台の騎砲兵大隊に現役入隊し、除隊後は陸軍省に軍属として勤務していた。このようなことから召集はないだろうと思っていたら、昭和十八年五月、召集令状がきた。即刻近衛野砲連隊に入隊した。

数日して部隊は満州宝清に移動、騎兵第三旅団騎砲連隊に配属となった。この部隊は間もなく、南方戦線に移動することになっていたらしい。そのためか、あるとき喀痰検査が行われた。そのとき、氏名を付した私の喀痰容器の蓋はだれかに取り替えられてしまった。取り替えた戦友は保菌者だったのか、私が保護兵とされてしまい、南方への転戦の折、残留させられてしまった。運不運は紙一重とやら、やがてこの部隊は全滅してしまった。だれか知らぬが、彼のために命拾いをした。

昭和十九年、大連の高射砲学校で教育を受け安東の